
運命の歯車

神成 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の歯車

【コード】

N9569F

【作者名】

神成 奏

【あらすじ】

親に見捨てられた神楽瀬波。でも、ある人との出会いで・・・

運命の出会い

私の名前は神楽 瀬波。両親に見捨てられた私は一人で生きていく
つて決めたの！！今はボロアパートに住んでるんだけど、幸せな日
々を過ごしてます！

で、今買い物の帰り何だけど道端に変なのが倒れてるんですけど・
・

「もしかして人？」

でも何で？何かの撮影とか・・・んなわけないよね（笑）一応話し
かけてみようかな。

「あの〜大丈夫・・・じゃないですよね？」

「うっ！！。。。」

動いた！！

「あの〜趣味ですか？それとも何か分けありで？」

「はっ！！！」

「は？」

「腹減った……。」

「なぐんだ。お腹がすいて倒れてただけなんですネ！邪魔してすみません（笑）じゃあ失礼します！」

ガバツ！！

「ちょっと待てよ！俺を助けてくれないのかよ……！」

「助けて欲しかったんですか？」

「……ああ。」

「そうなんですか……！分かりませんでした（笑）私のアパート近いですぞ……！」

「調子狂うな……。」

「アパート」

「何でも良いですよね？」

「ああ！！よろしくな（笑）所で名前は？俺の名前は立花 恭平。」

「名前ですか？私は神楽 瀬波つていいいます。」

「ふうん瀬波ね！いい名前だな！！俺、好きだぜ。」

「そう・・・ですか。出来ましたよ！！」

「わあ！！ハンバーグじゃん！サンキューな瀬波（笑）」

良かった。喜んで貰えたみたいで。

「俺、当分ここに住むからよろしく。」

「え？今、なんて？」

「だから、俺ここに住むっていつてんの!?!」

「なんで!?!」

「ちょっといろいろあってな。まあ今日からよろしくな(笑)俺は瀬波を気に入っただ!」

「そんなあゝ!?!」

一人暮らしの幸せな日々を過ごしていたのに。立花 恭平という人と一緒に住む羽目に。この人を捨うんじゃなかった(泣)

最高のプレゼント

あれから恭平という人と一緒に住んでるんだけど・

「くっつかないで!」

「いいじゃん!別にさ(笑)」

「くっとうしいんです!」

「そこまでいうなよ」

そうなんです。あれからというものの、ベタバタとくっついてくるんです。

「じゃあ私、アルバイトにいつてきますね。」

「アルバイト!? 瀬波はまだ高校生じゃないのかよ!」

「そうですけど、なにか?」

「がっ学校は？」

「学校ですか……。行きたいですね。でも、今生きていくだけで精一杯だから。」

「そうなのか。悪い事したな。」

「悪い事？もしかして恭平君が勝手に居座った事？」

「なっ！！わ、悪かったな。」

「なに言ってるんですか！恭平君は何か訳があるんでしょう？気にしないで（笑）」

「悪いな。じゃあ俺はお前に明日良いものをプレゼントしてやるから楽しみにしとけよ！！！」

「プレゼント？まあいいや。じゃあいつてくるので大人しくしててくださいね！それじゃあ！！！」

バタンッ

「さて、いっちょプレゼントの用意でもするか!」

瀬波の外見はいい。普通の女よりかわいいし綺麗だ。だが、何故親がないのか少し引っ掛かるな。

ブルルルル

「俺だ。至急用意して貰いたいものがある。ああ。頼んだぞ。」

ピッ

「よし。準備完了!!瀬波の喜ぶ顔が楽しみだな!」

一夜

「ただいま。恭平君大人しくしてましたか?」

「ああ!!大人しくしてた。えらく遅いんだな。」

「はい。立て続けなんでいつつも終わるのは遅いんです(笑)」

「そうか。だから細いんだな！ちゃんと食べないと倒れるぞ！！」

「たっ食べてますよ！！それに、痩せてないですし！！！」

「よし！！今日は俺が飯を作ってやろう(笑)」

「え？良いですよ。別に自分で出来ますし。」

「そんなに俺の作る飯が食えないのか！！！」

「いえ！！別にそういう訳では！！！」

「じゃあちよっと待ってる。」

―数分後―

「出来たぞ！！さあいっぱい食べよ(笑)」

出てきたのはうどん。普通のうどんだった。

「うどん？」

「ああ！瀬波はまず、うどんみたいなすつと入るやつから食べたほうがいいからな（笑）」

「クスッありがとうございます（笑）いただきます！」

「ああ！！たくさん食べるよ（笑）」

あんなに後悔していたのに今はこの人がいてよかったと思う。とても・・・

「明日は楽しみにしてるよ！朝から忙しいからな（笑）」

「何かあるんですか？」

「内緒。明日になれば分かる！！」

「??？」

「次の朝」

「瀬波！起きろ！学校に行くぞ！！」

学校？なんで？

「うーん・・・なにいて・・・！！なんで？」

「プレゼントだ！！学校に行くぞ（笑）」

恭平君が持っていたのは学校の制服。私がずっと夢見てた学校。

「でも、私、そんなお金ないです・・・。」

「いったら？プレゼント！早く行くぞ！！それとも、お姫様抱っこがいいのか？」

「けっ結構です！！用意して来ます。」

ガチャンッ

「ホントにかわいいな瀬波は。」

―数分後―

「用意出来ました。でも、ホントにいいんですか？」

「ああ！―じゃあ行くか（笑）」

「はい！―！」

恭平君のおかげで私は中学生のとき以来の学校に行く事ができる。
でも、何で恭平君はお金があるんだろう？ホントに不思議な人（笑）

ヤキモチ

恭平君の突然のプレゼントで私は学校に行く事になった。
で、校門の前なんですけど・・・

「お待ちしてました。立花様。さあどうぞこちらに」

「ああ。悪いな。行くぞ！瀬波」

「えっ？あ、はい！」

中は中学の頃と変わらない所何だけど、恭平君を迎える態度が少し
変。

「手続きは全部出来ております。それでは教室に行きましょう。」

「いい忘れてたが、瀬波と一緒にの教室な！」

「承知しております。」

―教室―

「中に教師がいるので、ノックして入って下さいね。それでは失礼します。」

「さあて行くか!！」

「はい!！」

コンコンッガラッ

「失礼します。」

「し、失礼します!！」

「おお、来たか!！今日から一緒のクラスになった、」

「立花 恭平です。よろしくね!！」

「で、こっちが」

「か、神楽 瀬波です！よ、よろしくです！！」

「という訳で今日からよろしくな！！席はあそこな。一二つ空いてるところ。じゃあホールルームをおわるぞー」

ガラガラッ

「ねえねえ、立花君って彼女いるの？」

「立花君って、どんな女の子がタイプ？」

立花君は女の子に囲まれてしまった。でも、瀬波は……

「瀬波ちゃんって彼氏いるの？」

「好きなタイプとかどんなん？」

「あ、あのー！つずつでお願いします。」

「じゃあ、彼氏は？」

「彼氏はい・・・」

「俺だよ。瀬波の彼氏。だから、あんまりいじめるなよ!!」

「恭平君!!なに言って!」

「ホントに?マジかよ。」

「ち、違います!!彼氏なんていませんから!!」

「マジで?冗談きついね」瀬波ちゃんは(笑)「

「立花君はどんな女の子がタイプ?」

「瀬波。」

「な、立花君も冗談きついね(笑)「

「マジだよ(笑)「

「恭平君、変な事いわないでください!!」

「だって、ホントだもん……。」

恭平君は私が怒っただけですぐにすねてしまう。でも、それがまたかわいい所でもあるんだよね（笑）

「立花君、カワイイ〜!!」

女の子達は恭平君のかわいい所に気がついたみたい。

「私、ちょっと失礼します!」

ガラガラッバタン。

「いやあ、かわいいよな〜瀬波ちゃん。俺、もろタイプだよ。」

「何言ってるんだよ!俺だってタイプだし。」

「だよな〜。考えてもみろよ。あの白く透き通った肌を抱き寄せて

さキスするだろ？あの顔が涙目になって顔真っ赤だぞ！マジで萌えるし（笑）」

「だよな。マジでいいよな（笑）」

「……エロガキ。」

「席を立ってしまっただけすみませんでした！」

「いや、いいよ（笑）気にしないでね！でさ、くくく」

あれから今日一日はずっと質問攻めで終わった。

―帰り道―

「楽しかったですね！みなさん優しくかったですし、恭平君ホントにありがとうございます！！」

「いいよ。別に……。」

「どうしたんですか？何かあったんですか？」

「別に……。」

「恭平君!! 言ってください!! 言わないと分かりません。」

「瀬波を学校に連れていくんじゃなかった。」

「え?」

「何となく、予想はしてたけどさ……男の見る目がめっちゃエロかった。」

「そ、そんな事ないですよ!! 普通でしたよ?」

「違ってたね、みんな変な妄想しやがって……。」

「妄想? 何をいつてるか分からないですよ?」

「とにかく、瀬波は俺のだからな!!」

「??あの～それってヤキモチですか？」

「?なっ!ちげーよ!!!」

「クスッ分かりました(笑) 今後気をつけます。」

「よし!さあ帰るぞ〜!!!」

恭平君はとても、不器用みたいです(笑) 自分の気持ちを素直に言えないみたいです(笑)

責任

昨日は質問攻めだったから疲れたけど、恭平君の可愛らしい姿を見る事が出来て良かった（笑）それに・・・

「おっはようっ！！瀬波！」

「おはよう！！麗香ちゃん！！」

そんなんです。昨日、初めて女友達を作る事ができました（泣）名前前は椎名 麗香っていうんですがとてもいい人です！！

「今日も仲良く二人で登校ですかなあ＝（笑）」

「な、なにいつてんですか！！昨日もいいましたが、恭平君は・・・」

「はいはい！分かってるよ！付き合っていないんでしょう？」

「分かってるなら！！」

「良いじゃん。別に〜（笑）」

「むう〜。」

「瀬波、早く行くぞ。」

「あ！ちょっと待ってくださいよ〜！〜！」

「ホントに鈍いなあ瀬波は・・・。」

「麗香ちゃん早くきてください〜！〜！」

「あいよ〜！〜！」

―教室―

「おはよう！瀬波ちゃん！今日も可愛いね（笑）」

「な、朝から変な事言わないでください〜！〜！」

「顔真っ赤にしちゃってかわいい〜（笑）」

「もう知りません!」

「ちょっといいの？恭平君。」

「何が？」

「はあ〜。何がじゃないわよ!〜瀬波はあの通り男子に人気なんだから、いつか取られちゃうわよ!〜」

「瀬波には昨日言ったから平気だ。」

「ばっかねえ〜。あの瀬波が気遣って注意してても、男子に軽く流されて、逆にからかわれてるじゃない!」

「た、確かに……。」

「気付くの遅いわよ!〜これからどうする気?」

「とりあえず、瀬波は俺のだ宣言を……」

「やめてください!!!ケンカするなら人のいない所で一対一が基本ですよ!!!」

「うるさい!!!アンタは黙ってて!!!」

叩かれてしまう・・・

バシッ!!

「!!!き、恭平君!?!」

「俺のためにケンカしてくれるのは嬉しいけど・・・瀬波を傷つける事はゆるさねえ!」

「恭平君・・・。」

「う、うめんなさい。」

「反省してくれたならいいよ(笑)でも、次するときは外で一対一な!!!」

「うん。ありがとう立花君!」

「恭平君、行きましょう!」

「は?何処に?」

「ほ、保健室です!!--行きますよ!」

「あ、ああ……。」

「保健室」

「先生いない見たいですね。」

「だな。」

やべえ〜。空気がもたねえ!。どどつする俺!!--

「い、いめんない。」

「え？」

「私が勝手に首突っ込んで……それで、恭平君が……ごめ……!」

「お前のせいじゃないよ（笑）俺が勝手に入ったんだから。」

「でも……」

「じゃ、じゃあ責任とれ!」

「責任？」

な、何いってんだよ!!責任ってなんだよ!!

「キ、キスして。ほ、ほっぺに……。」

でた〜!!なにいつてんだよ俺!意味不明じゃねえかあ〜（泣）

「いいですよ（笑）ほっぺですよね!お安いごようです!」

来たー！！

チュツ

やっやばい……。俺、溶けそう（笑）。今なら、消えてもいいや
（笑）

「じゃ、じゃあ帰るぞー！！チャイムなるし……。」

まさか、恭平君がキスしてほしいって言うなんて予想出来ませんでした
したが、した後の恭平君は顔が真っ赤でまたかわいい所を発見出来
ました！！恭平君はとてもかわいいです（笑）

「ごめんね！瀬波！ついつい口が。」

「いいですよ（笑）私はそのままの麗香ちゃんが好きですから！！」

「瀬波く！！ありがとう！！」

麗香ちゃんもいるし、恭平君もいる。それが私にはとってとても幸
せです！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9569f/>

運命の歯車

2010年12月26日21時35分発行